AとBとの手紙

獄中でよみがえった魂の記録

光瀬俊明

AとBとの手紙

獄中でよみがえった魂の記録

光瀬俊明

講談社

AとBとの手紙　NDC 916 19.4cm

定価　四五〇円

昭和45年5月20日　第1刷発行

著者　光瀬俊明

発行者　野間省一

発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽二丁目十二番二号
郵便番号一一二
電話東京九四二一二二一(大代表)
振替口座東京三九三〇

印刷所　豊国印刷株式会社

製本所　黒柳製本株式会社

★落丁本・乱丁本はおとりかえします

© TOSHIAKI MITSUSE 1970　PRINTED IN JAPAN

0095-166407-2253 (0)

まえがき

この本は、小説でも、創作ものでもありません。まったくのノンフィクションの、古い友人二人の「手紙集」です。――一人（A）は獄内から、一人（B）は獄外から。

もちろん、公表するつもりで書かれたものでないから、ことにA君はすでに出所して、今は立派な職業についているのであるから、「囚人」として書いた手紙が、活字となって人前に出るのはいささかA君に迷惑かとも思ったが、A君は今では坐禅修業の立派にできた明朗な人であるし、「あの手紙が人のお役に立つなら、喜んで……」ということで快諾され、（いやAとBの希望が完全に一致して）、二人の「手紙集」がここに本になった次第です。

Bも最初、これほど深入りするつもりは毛頭なかったが、警視庁の留置場でA君に会ってみると、二十数年ぶりに見る旧友の彼が、あまりにうらぶれ、老衰し、あらゆる世の人に見捨てられている姿にすっかり胸を刺され、法廷に「特別弁護」にも立つ気になり、裁判長に彼の更生への努力を誓った手前、ついに熱心な数多くの手紙を書く羽目となり、心を尽くしてみると、A君に心から感謝され、慕われ、ついにBは昔日の友情に返って、本気にA君の更生を祈願し、本気に彼に「坐禅」を勧める気持ちになった次第です。

Bはもともとものを書く商売ではあっても、最近、こんどほど数多くの長い手紙を熱心に書いたことはなく、また、こんどほど鉄面皮に、偉そうに、人に「坐禅」を勧め、「宗教」を説いた

ことはありません。もちろんその「宗教」の説き方は、クサいお説教でなく、「文学的」な解説に終始したつもりですが。

A君が退所して、大事に保存していてくれたBの手紙の束を示され、Bも大切にしていたA君の切々の獄中感想記を出してみると、この熱心な、本気な、二老人の「宗教問答記」また「生活問答記」が、Bはなんだかこれをこのまま死蔵するのが惜しくなり、これを「本」にすれば、これで生活の励みを得てくれる世の「悩める読者」がどこかにありそうな気もするし、最近の大学生騒動などの、収拾つかぬ社会の紛乱に、社会の行く道、また自分の進むべき道を「宗教」に求めようとする人びとへの、何らかの参考書にもなりそうな気がして、ことにかつてのA君のように、今獄中で精神的に苦悶している人たちの手にでも触れれば、これは望外の喜び、とBは感ずるようになったのです。

あのマルクス主義に夢中になり、学生運動のトップに立ち、「日本を革命しよう」と企て、不運にして、あるいは当然の結果として獄中につながれている「学生活動家」たちが、もし獄中でこの本でも手にしてくれたら……、そして敢然と、マルクスだけでは不十分だと、日本に本当の「宗教的社会革命」でも始めてくれたら……、などと、Bはじつにドラマチックな、空想的な喜びさえ、今感じています。

とまれ！　この「手紙集」を世に贈ります。

A君は、なかなか才人で、文才があって、女にはとても多彩な男です。その手紙はなかなかおもしろいです。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

どうぞ、みなさん、気楽にお読みください。

一九七〇年厳冬

編者
B

目次

まえがき

I　二十年目の対面……七
——東京拘置所時代——

拘置所の壁に向かって　9
いつくしみの雨　29
怒った牝猫　44
三人の女性　68
第二回公判のあとで　83
神を成就するもの　93
純情の人　109
結婚届のこと　120
つのる恋情　129
ある憤りと下獄と　138

Ⅱ 光と生命に向かって……一四五
——府中刑務所時代——
牢獄の初秋　147
鉄格子を越えた結婚　160
魂の深奥の響き　172
罪神一体　181
師走のひとりごと　197
一日千秋の思い　208
仮釈放の福音　223
黎明の時　236
Ⅲ 後日物語……二四三
旅立つ二人　245
あとがき　253

装丁・カット　風間　完

I

二十年目の対面

——東京拘置所時代——

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

拘置所の壁に向かって

六月二十七日（一九六八年）　**AよりBへ**

貴兄とお会いできましたことが、たいへんなよろこびでした。

まして、とてもお元気なご様子に、むかしの想いがそれからそれに映し出されました。

人間の一生なんておもしろいものですね。このごろしきりに、いのちという問題が考えられています。

私たちが若いとき、農商務省（今の通産省のことをあのころはこういったものですね）の役人で、東大出身の秀才の山田憲という農学士が、いわゆる「鉛弁」（鉛木弁造）という有名な京浜きっての高利貸を、野球のバットでなぐり殺し、新潟県の信濃（しなの）川へバラバラにして、トランク詰めにして、流しました。あの有名な「バラバラ事件」（その後流行したその第一号）、または「トランク詰め事件」といわれた大事件で、もちろん山田農学士はとらえられて「死刑」の断罪でした。

その山田農学士が、「死刑」の前日、恩師福岡の真田真丸文学士から電報がきました。

「サイタサクラニ、チルサクラ、ソノマタアトカラ、サクサクラ」

というのでありました。

係りの者からそれを渡された山田農学士は、無限につづく――あとからあとから、生まれかわり、死にかわり、無限につづく人間の生命の不思議さを思って、――そして過去、現在、未来と三世を永遠に貫く人間の生命の、その流れの中のただ一つの環に過ぎない自分の小さい生命のことを思って、それへの深い確信に、ニッコリ笑ってうなずいた、ということであります。そしてその断頭台での姿も堂々として、じつに立派であった、ということであります。

人間もここに徹したとき、はじめて悪びれず、心から悔いて人を許し、人と許しあえる心のゆたかさが生まれるものだと思います。

「歎異抄」の、「義なきを義とす」、というあの境涯なのでしょうね。

私も貴兄にお会いして以来、ここの留置場の壁に向かって、よく坐禅を組みます。そして閉じた瞼の中に、いつも貴兄の姿を思い浮かべます。そしてそこには、「二つにして一つ」の融合の世界、――人間のみに味わえる暖かい情けの世界、――それを思って思わず感涙にむせぶことがあります。

不覚にも落ちし涙にしたしみて指ふれてみつ老囚無惨

（連作五首の中の一首）

たいへんながながと書いてしまいました。じつはこのあいだのご来訪のお礼をいうつもりが、こんなことになってしまったのです。

あらためてお礼を申し上げます。

このあいだは、本当にありがとうございました。

末筆になりましたが、久しくお目にかかりません令夫人に、くれぐれもよろしくお取りなしのほどを。

六月三十日　BよりAへ

六月二十七日付けのお手紙、今受領しました。

先日の僕の警視庁訪問を、深く喜んでいただいて、僕も心から嬉しく思いました。

そして先日の警視庁での僕の話を「真に受け」られて、さっそく「坐禅」を始めてくださった由、これがまた何よりの僕の喜びでした。

先日の、貴兄の僕に突然会ったときのあの涙といい、今日の坐禅開始のお手紙といい、もう貴兄が、警視庁刑事両氏の僕への希望のように、すでに「更生」してしまってくださったかのように、明るく、嬉しく、むしろ楽しい心地になりました。むしろ僕のほうで、貴兄に「感謝」したいような気持ちです。なにか貴兄のために尽くしてあげることはないか、なにかこの際、不幸な貴兄のお役に立ってあげられることはないか、もしあったらなんでもしてさし上げたいような、生まれつき「甘造」の僕は、もう無条件のような貴兄の信用状態です。

先日、僕の家に、いきなり二人の老若のお客がきて、「警視庁部長刑事××××」、「警視庁刑事○○○○」の二枚の名刺を出されたときは、僕は久しぶりにちょっと緊張を感じました。――近ごろはなにも思想問題で、警視庁のご厄介になるようなことは、しでかしていないはずなのに……、と強い不審が先に立ちました。

二人を上に招じてみると、じつに十数年来の、あるいはそれ以上、二十数年も会っていない貴兄の「刑事事件」だというので、僕は二度ビックリ。——へえ、A君、久しく会わないあいだに、そんなコースを辿っていたのか……。

「いったい、何の事件ですか？」と尋ねてみると、

「私文書偽造、行使」の事件で、今警視庁にあげているのだ、とのこと。

「で、どうして私のお取り調べを？」というと、

「じつは彼は、ある医専を三年までやった中退者であるところから、医者の正式資格はないのに、あなたのご尊父、故医学博士B—××氏に教えていただいたという、ご尊父のご友人で、自分と同姓同名の〝医博A—〇〇氏〟の履歴書を偽造して、それで、ブラジル渡航を企てた罪」だという。「で、どうしてそれぐらいのことで、まだ何も実罪を犯していないらしいのに、なぜ警視庁にまで引っ張って、私の証言などをお求めになるのですか？」と尋ねると、

「彼はそれと同じようなことをして、すでに〝前科六犯〟なのです。だから簡単に許すわけにはゆきません」という。

僕はいよいよ言葉に詰まってしまいました。

——ほう、A君はよほど次から次に追いつめられたのだな。だがあれほどの秀才の彼が、なんでそんな、「私文書偽造、行使」などという、すぐあとでバレてつかまるようなことをやったんだろう！ ——ほう、よほど生活に追いつめられたんだな。——次々の、「前科」に追われた禍なのだろうか。それともなにかほかに気の毒な事情があったのだろうか。——それにしても青年

のとき、ひどく才士肌で、才気煥発、相当に無軌道、でたらめではあったけれども、根はとても純真で、いい男だったがなあ。——人間の運命ってわからぬものだなあ……。

「彼はいったい、今、歳はいくつだといいます？」

「六十四歳のはずです」

——ほう六十四歳。僕よりも五つ歳下だったのかな？　——だがわれわれの歳になって、まだ警視庁の留置場生活はたまらないなあ！

「どうです、A君、体は丈夫ですか？」

「ええ、体はしごく壮健のようです。——なあおい？」

「ええ、しごく壮健だといっています。——ただ〝アル中〟（アルコール中毒）があるようです。始終頭をブルブルふるわしています。なにしろ、ひどい酒癖を持っていたようですからね。酒癖とギャンブル、——競輪と競馬、これですっかり身を持ち崩しての結果らしいですね」

ふうむ、酒癖とギャンブル。——たいていの「前科」者たちの、公式的に通る道だな……、と僕が貴兄の現在をあれこれと推察していると、そばで若いほうの、「部長刑事」の名刺を出した「学校出」らしいほうが、

「——失礼ですが、簡単な調書を取らしていただきます。——ところで、あなたとAとの出会いは？」

そこで僕は、貴兄との出会いを簡単に刑事氏に話しました。貴兄が僕の書きものを愛読して、叔母の家の二階にいた僕をいきなり訪ねてきたこと。二人は気が合って、それから再々貴兄が僕

を訪ねてきたこと。そのうち貴兄は叔母たち夫婦とも親しくなって、ついには泊まっていくことなども多くなったこと。それに貴兄にはじつに仏様のような「里親」のお婆さんがあって、僕が貴兄と親しくするのをとても喜んで、再三僕と叔母に貴兄のことをよろしく頼みに見えたこと。そんなことで僕たちはまるで旧知の友人のように親しくなったこと……など。

すると刑事氏は、

「では今でも、あなたは彼を信用していられますか？」

「さあ、私は最近の彼を全然知りませんが、――私の記憶、印象に残っているA君は、すこぶる純真な善人です。文学者としての私の考えでは、人間の性格って、そう変わるものではないから、おそらく彼は、まだ本当の悪人や罪人になり切ってはいないのではありませんか。なにか、いわゆる〝魔が差して〟、――ちょっとしたきっかけで、そんな次々の〝前科〟を重ねているのと違いますか。――少なくとも彼は、私の印象では、とても頭のいい〝才子型〟の男でした。だからそんなつまらぬ〝詐欺罪〟になんか手を出すはずはない、と思います。――いやいや、そんな〝才子〟だから、あるいはかえってそんなつまらぬ〝知能犯〟に、ひっかかってしまったのかもわかりませんね」

と僕が笑い顔をすると、

「で、あなたのご尊父と彼の出会いは……？」

「さあ、もう何十年も昔のことで、私の記憶は薄いのですが、――私はこんな大雑把者で、すぐだれでも、自分の知人に紹介して、よく人に怒られますから、――私はA君もきっと、私の父の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.